

〔論 文〕

体育系大学の遠隔授業と対面授業による ダンス授業について

——実施内容と今後の課題に関する考察——

光 安 知 佳 子

要 旨

体育実技は通常対面で実施するが、2020年度は殆どの大学がCOVID-19による影響により遠隔授業を実施することとなり、教員の工夫が求められた。本研究では、2020年度前期授業で実施した遠隔授業と対面授業の感想から満足度についてテキストマイニングを用いて定量的・定性的に分析を行い、教員はどのような授業を展開する必要があるかを明らかにすることを目的とした。その結果、遠隔授業でも対面授業と同じ満足度で実施する為には、学生の踊る環境の配慮と学生同士の「かかわり」を深くする授業展開が必要であることが明らかとなった。

キーワード：創作ダンス、遠隔授業、対面授業、ダンス授業、ダンス教育

I. はじめに

1. 研究の背景

大学におけるダンス実技は、通常対面で実施される。特に教職科目のダンス授業については、小学生・中学生・高校生を対象とした指導法を習得する為に模擬授業などを実施する必要があり、対面授業は重要とされている。2020年度のダンス実技については、多くの大学がCOVID-19感染防止の為、遠隔授業での実施となった。遠隔授業の導入時期は2020年3月以前の4.2%に対し、2020年4月～5月は感染対策として遠隔授業へ移行した大学が93.7%急増した。その後2020年度の遠隔授業実施率は97%に上った。また、高橋(2021)は「2020年前期は74%の大学教員が遠隔で実施し、内訳は「遠隔授業のみ」43%、「一部遠隔で実施」57%であった。遠隔授業の形態は「①オンデマンド型」43%、「②同期型(同時双方向型)」32%、「①②の組合せ」25%であった。」と述べている。2020年全国大学体育連合の調査によると、教養教育として開講されている大学体育の実技実施は、回答した48大学中、15校(31.3%)はオンラインの遠隔授業で開始し、その後の状況で対面授業に移行する計画で進め、6校(12.5%)は対面での体育実技を開講しなかった。体育実技を予定通り実施と回答したのは1校のみであった。つまり、回答した48大学中、多くの大学が2020年度前期の体育実技の開始を遅らせたのであった。さらに山津(2021)は、「特に大学における体育教育(以下、大学体育)は実技・実習の形態で開催されることが多く、遠隔授業で代替しやすい他教科の授業に比べて影響を受けやすいと考えられている」と述べている。以上のことから2020年度前期における大学体育はCOVID-19による影響が大きかったと考えられ、教員側も授業の工夫が求められた。

2. 研究目的

筆者が担当する2020年度前期の体育実技は、遠隔授業から対面授業へ移行型であった。実技授業が遠隔授業から対面授業へ移行する授業展開はこれまでに事例はなく、学生も教員も試行錯誤しながら取り組むこととなった。現在もCOVID-19感染防止の為、遠隔授業の実施や遠隔授業から対面授業へ移行するなど感染症対応の授業は継続している。

久保田(2021)は、COVID-19の影響から論文数は増えているものの遠隔授業に関する論文や対面授業と比較した学習効果に関連した論文等は少ないと述べている。しかし、Withコロナ時代が2年経った現在わずかだが遠隔授業に関する研究報告が増えてきている。田中(2021)は、大学における遠隔授業の実践と課題について、オンライン授業を半期間経験した学生を対象に、遠隔授業のメリット・デメリットを調査した。西田他(2021)は新型コロナウイルス感染症第1波の流行直後における体育授業の受講に伴う学修成果(遠隔授業による主観的恩恵と身体活動)について、受講実態を踏まえて明らかにしている。須田(2021)は、新型コロナウイルス感染症蔓延下における大学体育実技の運営について体育実技(ウォーキングエクササイズ)で使用している学生と教員のチャット分析から遠隔授業の成果と課題を明らかにした。ダンス実技授業の先行研究では、高橋(2021)によると、遠隔ダンス授業を双方向のリアルタイム・対話形式で実施した遠隔授業は、踊ることやグループでの即興表現を楽しみ、実技であっても実施は可能であり、事前・事後学習や課題を体験・記述することで教員養成系ダンス授業としての目標が達成できたと報告している。さらに、遠隔授業では目の前の学生の変化に臨機応変に対応できる指導者の実践力が課題であると述べた。山崎(2021)は、日本の伝統文化の手拍子による交流の有効性を目的とし、遠隔のダンス授業に手拍子を取り入れた。手拍子の活用により協調や交流の有効性が示されたと述べている。これらの先行研究はいずれも教職課程の講義授業やダンス授業以外の体育実技を対象とした遠隔授業に関する課題や授業成果についての報告であり、遠隔授業と対面授業を比較した研究ではない。また、ダンス実技授業の研究報告も前述の通り、遠隔授業を中心とした授業成果の研究報告であり、遠隔授業と対面授業を比較した結果から今後の課題を報告している研究が少ないことは明らかである。

そこで本研究の目的は、2020年度前期授業で実施した遠隔授業と対面授業の感想を比較することで、学生たちが今後どのようなダンスの授業を求めているのか、また、教員はCOVID-19が蔓延する中でどのような授業を展開する必要があるかを明らかにする。本研究が今後の遠隔授業(ダンス実技)の一助となれば幸いである。

II. 研究方法

1. 対象授業・授業方法

体育系大学2020年度前期のダンス実技(90分間×15回)を対象に遠隔授業と対面授業を実施した。遠隔授業は、第1回～第9回、第13回の計10回実施し、対面授業は第10回～第12回、第14回～第15回の計5回実施した。第13回目の授業は大学からの指示で遠隔授業となった。遠隔授業の際はGoogle ClassroomのMeetを利用し、教員の見本動画を元に動画公開、パワーポイントでの説明資料を提示しライブ形式で授業を行った。遠隔授業では学生が公平に受講できるようキャリア環境を考慮し、学生側のカメラ画面はオフで実施した。

2. 対象者と特徴

大学2年生69名のダンス実技の授業を対象とした。体育系大学2年生のダンス授業は必修科目であり、本授業は3年次の教職ダンス授業へ繋がる内容となっている。対象学生69名に対してダンス経験の

Aug. 2024

体育系大学の遠隔授業と対面授業によるダンス授業について

有無について「はい」、「いいえ」の回答を求めたところ、「はい」と回答した者は18.8%、「いいえ」と回答した者は81.2%であった。ダンス経験があると回答した者の多くはダンススクールが最も多く、続いて部活での経験者が多かった。本授業は8割が未経験者という状況の中で遠隔授業を開始することとなった。

大学入学前までにダンス授業を受けたことの有無については、「受けたことがある」58%、「受けたことがない」42%であった。中学校ダンス必修化が2008年に告示された後、2012年に第1学年及び第2学年のダンス領域が完全必修となり、2021年度で10年目を迎えた。2019年度入学の本授業の履修学生は、遡ると2013年度は中学校第1学年である。中学校でダンスが完全必修となった後の学生たちであるが、多くの学生がダンスの授業を受けていない。この要因は、体育実技の現場でダンスがまだ浸透していなかったことが伺える。ダンスの授業を「受けたことがある」58%の学生の多くは、現代的なリズムのダンスの授業を経験していた。続いて経験の多かったダンスの授業は創作ダンス、フォークダンスの順であった。

多くの学生が現代的なリズムのダンスを授業で経験していた理由は、完全必修となった当時、ダンス指導に苦戦した体育教員が創作ダンスやフォークダンスに比べ、比較的指導のしやすかった現代的なリズムのダンスを多く取り扱っていたからであろう。

3. 授業内容

全15回の授業内容の内、第1回～第9回、第13回は遠隔授業、第10回～第12回、第14回～第15回は対面授業で実施した。本授業は、文部科学省の学習指導要領に基づき①ダンスの基礎的な身体の使い方を「学び・創る・踊る・観る」という総合的な視点で、ダンスの技能、及び知識を習得すること、②教育現場等での指導力や体づくり運動の指導内容について理解を深めることを目的とした。遠隔授業と対面授業ともに事前に資料をアップロードし、各回の授業課題を授業終了後にGoogleフォームにて自己評価、感想などを提出させた。遠隔授業時は、動画資料も含め課題も動画提出とした。

遠隔授業の手順は次の通りである。①開始時に出席確認、②資料や動画などを共有画面にて教員が説明、③カメラをオンにして上半身のみ動かすなど授業内容に応じて実施した。遠隔授業中の実技については、学生が自宅で動ける範囲で安全面に十分注意することを伝えた。また、課題のダンスについても安全面に配慮しながら撮影することを伝え、無理のない範囲で動画提出の指示を行った。高橋(2021)が遠隔授業で工夫したように動画配信が多くても学生と教員の相互作用を重視すること、教員と学生の双方向の指導やグループ創作を通じて学生同士の活動を実施することにより、遠隔授業でも実技授業を成立させることが可能である。創作ダンスのグループ創作は、ブレイクアウトルームを設定し学生同士でカメラオンにすることを相談した上で、画面上でダンス創作を実施する他、個人で撮影した動画を学生同士で共有し、編集したダンス動画を共有画面で発表するなどして実施した。

対面授業は、2m×2mの正方形の枠をテープでライン引きし、マスク着用、大声での会話や接触の禁止等感染対策をした上で、ソーシャルディスタンスを保ったダンス授業を実施した。90分間の授業中、指定した正方形の枠内で踊ることとしたが、各回の授業で指定場所を変更することで学生同士のコミュニケーションを図った。通常のダンスの授業に比べ、移動や接触の無い、かなり制限のあるダンス授業となった。

4. 分析方法

学生69名に対して6セクション32項目(1.ダンスの経験について-6項目/2.小学校・中学校・高等学校で受けたダンス授業について-7項目/3.遠隔授業の満足度-6項目/4.遠隔授業から対面

授業が開始した満足度-6項目／5. 今後のダンス授業に期待すること-4項目／6. 本授業での学びについて-4項目)のアンケートを学生が、回答に慣れている授業課題と同様のGoogleフォームを利用し、データ収集した。回答方法は質問内容によって選択肢や自由記述とした。

本研究では、学生の実態の把握と、遠隔授業と対面授業の満足感を比較する為、セクション1～4の項目から必要な項目の回答を使用した。遠隔授業と対面授業の満足感の比較については、アンケート収集で得たテキストデータを分析データとし、テキストマイニングという手法を用いて定量的・定性的に分析を行った。分析は、フリーソフトであるユーザーローカル テキストマイニング¹⁾を導入し、次の通りの手順で行った。まず、対象学生69名が記述した遠隔授業の感想と、対面授業の感想を分析データとし、テキストデータをMicrosoft Excelにてまとめた。このデータをユーザーローカル テキストマイニングツールに取り込み複数回データの読み込みと前処理を行った。授業内容と関係のない記述(「欠席届を提出していません、すみません」など)は除外した。また、文意を変更しないよう考慮しつつ誤字脱字の修正を行った。

以上の処理を終えたデータを使用し、対象学生が記述した感想から出現頻度が高い言葉を集めた図(ワードクラウド)と分析をさらに深める為、共起頻度が高い検索ワードを線で結んだ図(共起キーワード)を作成した。これらの分析を用いることで、自由記述から読み取ることのできない学生たちの具体的な満足感の傾向を見ることが出来る。

5. 倫理的配慮

研究対象の学生には、本研究の趣旨を説明し、個人情報保護の立場から、収集したデータは研究のみを使用することを説明し、同意を得た上で協力できる対象者に限り実施した。また、本研究の目的や意義、方法、研究への参加を拒否してもその後の環境において不利益がないことを説明し、アンケートは匿名でデータ収集を実施した。

Ⅲ. 研究結果

1. 語の出現数

対象学生69名から得られた記述データは次の通りである。遠隔授業の感想では5150文字から898語、対面授業の感想では5928文字から1007語であった。ここからエラーの原因になる記述を除外した結果、遠隔授業の感想5130文字から894語、対面授業の感想は5816文字から1001語が抽出された。出現回数の多い語に共通して「ダンス」「楽しい」「できる」などが上位となり、授業形態である「遠隔」「対面」などの特徴的な語が抽出された。遠隔授業では「遠隔」の出現が「対面」よりも高く、対面授業ではその反対の傾向がみられた。遠隔授業の感想では、「遠隔」の語に関連して「不安」「不慣れ」などネガティブな要素がみられた。「対面」の語に関連しては、遠隔と比較して好意的な感想がみられた。対面授業の感想は、「対面」の語に関連して「よかった」「できた」など達成感による満足感を感じられる感想であった。「遠隔」の語に関連しては、遠隔から対面となった感染リスクへの「不安」や遠隔授業の「回数」が多いことへの不満がみられた。以上をまとめると、遠隔授業の感想からは「遠隔」の語からは遠隔そのものに対する不満感、「対面」の語からは対面を好意的に捉える傾向がみられ、対面授業の感想では「対面」の語からは達成感による満足感、「遠隔」の語では対面を求める不満感がみられた。これらの感想から学生たちがダンス授業に対して対面授業を求めていることが伺える。

2. ワードクラウド

図1は、各感想の文章中で出現頻度が高い語を複数選び出し、中央に大きく図示している²⁾。

それぞれの図を見ると共通して「踊れる」「踊る」「踊りやすい」「取り組みやすい」「ダンス」などの語が入っていることが分かる。遠隔授業の感想は「遠隔」や「不思議な気持ち」が多く、それと関連する「心寂しい」が目立った。対面授業の感想では「踊れる」「踊る」が多くそれに関連する「ダンス」、「踊りやすい」「取り組みやすい」などの特徴がみられた。

ダンスへの「取り組みやすさ」は遠隔授業よりも対面授業の方が高く、「踊りやすさ」は対面授業よりも遠隔授業の方が、若干出現率が高い傾向にあった。遠隔授業は個々で受講するため周囲の目が気になる学生にとっては「一人だからこそ全力で踊りやすかった」というように遠隔授業の方が踊りやすい傾向にあるのだろう。対面授業では「取り組みやすさ」について「対面だと実際に見ることができるため分かりやすく取り組みやすかった」など、直接指導を受けることで取り組みやすさを感じていた。それに関連して踊る広さを確保できることから「マス目があるから踊りやすい」など、「踊りやすさ」も対面授業は高い傾向がみられた。また、遠隔授業では「心寂しい」「恥ずかしい」などのネガティブな語の頻出に対し、対面授業では「楽しい」「達成感」などポジティブな語の頻出が目立っていた。

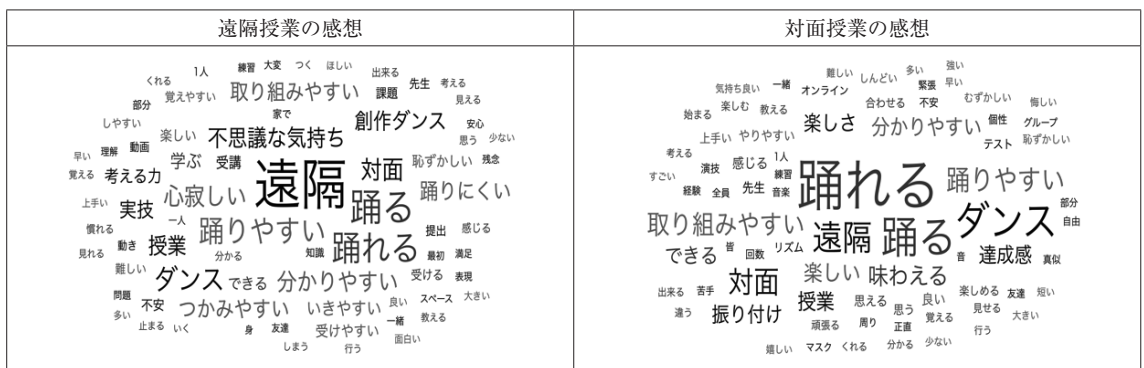


図1. 遠隔授業と対面授業の感想（ワードクラウド分析）

3. 共起キーワード

図2は、抽出語の関係性を可視化するため、文章中に出現する語パターンが線で結ばれ、出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で示される³⁾。

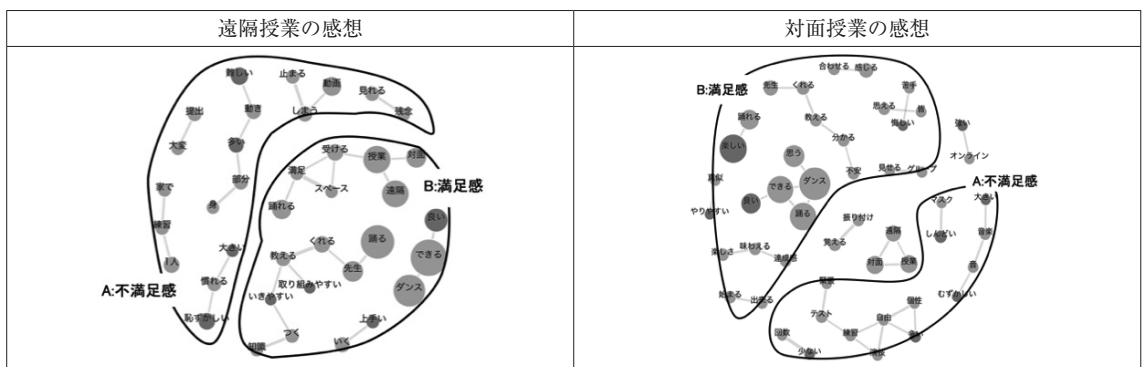


図2. 遠隔授業と対面授業の感想（共起キーワード分析）

共起キーワードで分析した結果、A：不満感とB：満足感の2パターンに分類できた。

遠隔授業の感想からA：不満感の語群は、遠隔授業で増えた課題の「提出」や、「動画」が「止まる」、「家」で「1人」で「練習」することが心寂しく思う他、画面越しでは限られた画角や画面の大きさから「難しい」と思う「動き」が「多く」あったことが伺える。これらは学習環境に関連した不満が中心であると言えよう。次にB：満足感の語群では、小さな2群と大きな2群が形成していた。小さな群は「上手くいった」「上手くいく」や、「できる」に対して「良い」や「ダンス」が関連し、成功したことで満足したことが伺える。大きな群の1つ目は「先生」が画面越しに「踊る」や「教える」ことで、「取り組みやすさ」を感じ、将来教員になることを見据えた学生達が「知識」を吸収しようとする姿勢がみられた。2つ目は、「授業」を「対面」でも「遠隔」でも「受ける」ことに関連して、「踊れる」「スペース」が学生達の「満足」に繋がっていることが伺える。以上のことから、遠隔授業は学習環境で満足感が左右されていると言えよう。

対面授業の感想からA：不満感の語群では、「音楽」の「音」に合わせて踊ることが「難しい」と思う他、対面の授業内容に創作が入っていたことから、「個性」「演技」「練習」「多い」の語全てに「自由」が繋がりを持っていた。学生達は型にはめず自由度が高い創作ダンスの魅力を理解するとともに、即興で終わらせず反復練習の重要性も理解していると考えられる。対面のまとめの授業では実技「テスト」を実施した為「緊張」もみられた。感染対策上「マスク」を着用した実技は「しんどさ」を感じさせる授業となったが、対面授業の「回数」が「少ない」という不満から対象学生達は対面授業を求めていることが伺える。B：満足感の語群からは「ダンス」「踊る」「できる」「楽しい」などが関連した語が多く出現している。「不安」があっても「分かる」に繋がることから、教員や仲間の「真似」をしながら対面での「やりやすさ」を感じ、「楽しさ」を「味わい」ながら「達成感」を得ていると推測される。また、対面授業のB：満足感の語群では、遠隔授業から頻出されなかった「皆」「グループ」など仲間に関連する語と「合わせる」「感じる」「見せる」といった共同作業に繋がる頻出語の特徴がみられた。

以上をまとめると遠隔授業では学習環境で満足感が左右され、対面授業では、学生自身の学習へのつまずきや感染対策上の規制に不満を持つ傾向があり、仲間との関わりによって達成感を得ることで満足感を得ていることが明らかとなった。

4. 考察

本授業は、事前アンケート結果の通り約8割がダンス未経験者且つ、必修科目の為ダンスに興味のない学生も多く、初めてダンスを経験する学生が多かったと考えられる。感想の中には、ダンスの特徴でもある創作の「自由」や「仲間」と関わることで得られる「達成感」などの語が抽出されていたことから、遠隔授業と対面授業を通じてダンスに関する知識が得られていたと推測される。また、共通して見られた頻出語上位の「ダンス」「楽しい」「できる」という語の関連から、未経験者あるいは苦手意識のあった多くの学生にとって、授業で行った創作活動がダンスを克服する機会となっていたことが考えられる。

コロナ禍における遠隔ダンス授業の成果と課題を研究している高橋(2021)の報告によれば、学生は遠隔授業でオンラインダンスに出会い、対面を通して個性ある動きで創作し、ダンスの表現や指導に大切なことを考え、伝えることを学んだことが明らかとなっている。このことから、本授業で実施した遠隔授業と対面授業の授業内容は学生の戸惑いがあるながらも教員の導きにより遠隔でもグループ創作を実施し、対面授業へ移行後は遠隔授業で実施した内容が繋がりを、学習が途切れない工夫がされている為、学生の学習成果が期待できる授業であったと言えよう。

本授業の満足感については、対面授業での満足感が高く、その要因はダンスの本質でもある「仲間」との関わりによる「達成感」が大きく関係していると考えられる。遠隔授業に切り替わる可能性がある今日、学生たちがダンスの授業に求めていることは、ダンスを通じた仲間づくりや繋がりをのたろう。様々な年

間行事が中止となっていく世の中で、ダンスの授業は仲間との思い出作りや交流の場として求められているのではないだろうか。対面授業ではなるべく多くの学生同士が交流できる授業を目指す必要があると言えよう。また、対面授業では学習環境も整っている為、学習のつまずきや感染症対策上の規制によるストレスが不満感に要因していた。以上のことから、学生個人のつまずきを取り除く為、教員は個々の学生に目を向け、丁寧な指導が求められているのだろう。

2020年COVID-19の影響で遠隔授業へと切り替わり、教員も学生も試行錯誤しながら新しい手法で授業に取り組んできた。遠隔授業が開始され、まだ数年しか経っていない現状、遠隔授業で学習に取り組む環境が整っていないことが授業への不満感に繋がることは仕方のないことだが、早急に対応する必要が求められる。今後は遠隔授業の学習環境を整えることを踏まえつつ、学習環境が整ってなくても満足感が得られる授業の工夫が必要となってくるだろう。丁寧なダンスの指導や動画、資料の準備、ツールを利用してのグループワークなど、学習環境が整っていない学生を配慮した授業を実施することで、「できた」「楽しい」など本授業で満足感に繋がった結果から、それらは効果的であると考えられる。しかし、教員の負担が大きくなる傾向も視野に入れておかなければならない。この問題については今後の課題とする。

本授業では、遠隔授業と対面授業の満足感、不満感に関して学生の感想から今後の授業に繋がる手がかりを読み取ることができた。しかし、半期授業の為、期間が短い事や対象人数が少ないことに関しては本授業で十分な情報収集を達成することはできなかったと考えられる⁴⁾。その理由として、本授業計画は、COVID-19の感染状況により事前に計画することが困難だったこと、突発的な授業変更を求められ本授業は実験的な面も加味していたことに伴い他クラスを担当している教員へ研究の協力が得られにくかったことが挙げられる。COVID-19の影響は、2020年で収束することなく今後も影響は続くことが予測されることから、事前計画などによって対象期間や対象人数については達成可能であると考えられる。本研究では具体的な満足感の傾向を読み解く為、単語に重点を置きワードクラウドと共起キーワードで分析を試みたが、より深く掘り下げるためには、文章を品詞で分類し名詞に係る形容詞からポジティブとネガティブに解析できる係り受け解析や単語の出現傾向が分かる2次元マップによる分析が必要だと考える。

今後の課題として、より多くの情報を集めた上でこれらの手法を用いて分析する傍ら、教員の負担を考慮した遠隔のダンス授業の方法を探っていきたい。

IV. 結論

本研究では、69名の学生を対象に遠隔授業と対面授業の感想からテキストマイニングの手法を用いてワードクラウドと共起キーワードで分析した。各感想から満足感を比較し、学生達が今後どのようなダンス授業を求めているのか、また、教員はCOVID-19が蔓延する中でどのような授業を展開する必要があるかを明らかにすることを目的に本研究を進めてきた。その結果、以下の通りにまとめる。

- 1) 遠隔授業は「学習環境」により満足感が左右される為、「学習環境」を配慮した授業の工夫によって満足感が得られた。
- 2) 対面授業はダンスの本質でもある「仲間」との関わりで「達成感」を「味わう」ことによって満足感が得られた。
- 3) ダンスの授業は仲間との交流の場として関わりを多く持たせる授業が求められている。
- 4) 対面授業では個々の学生を丁寧に指導することが求められている。
- 5) 遠隔授業が開始され数年しか経っていない為、学習環境を配慮した授業の工夫が必要である。

以上のことから、満足感は1), 2)によって得られることが分かった。また、学生が今後のダンス授業に求めていること、教員がどのような授業を展開すべきかは、3), 4), 5)であることが結論づけられた。

注

- 1) 株式会社ユーザーローカル AI テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp>) を使用して分析
- 2) 株式会社ユーザーローカル AI テキストマイニングツール ワードクラウドの説明文より抜粋。通常はその単語の出現回数が多いほどスコアが高くなるが、「言う」や「思う」など、どの文書にもよく現れる単語についてはスコアが低めになる。スコアの算出方法は一般的な文書では、単語の出現回数だけでいえば「今日」や「思う」「ある」などといった、“ごく一般的な単語”が何度も出現してしまう。このような単語は、どういった文書にも出現する単語であるため、たとえ出現回数が多いとしても、意味が薄い、あまり重要ではない単語といえる。単純に回数だけをランキング化しても、一般的な語が混じってしまいその文章の特徴をつかむことができない。この問題を解決するため、テキストマイニングでは「一般的な文書でよく出る単語は、重要ではないため、重み付けを軽くする」、一方「一般的な文書ではあまり出現しないけれど、調査対象の文書だけに多く出現する単語は重視する」仕組みを取り入れている。こういった特徴語を抽出するためのロジックとして、一般的にTF-IDF法という統計処理をする。この手法により、出現回数だけでなく、重要度を加味した値が「スコア」となり、スコアが高い単語は、そのテキストを特徴づける単語であるといえる。
- 3) 株式会社ユーザーローカル AI テキストマイニングツール 共起キーワードの説明文より抜粋。共起とは、一文(改行や「。」などで区切られた各文)の中に、単語のセットが同時に出現するという意味である。共起回数は、一緒に出現した回数を指す。たとえば、「あのメーカーが作った自転車は、とても速いらしい」「速いスピードで自転車が駆け抜けていった」という2文をテキストマイニングした場合、「自転車(名詞)」と「速い(形容詞)」という単語がセットで出現する(=共起している)回数は、それぞれ2回。一緒に出てくる単語を線で結んだものを「共起ネットワーク」と呼んでいる。
- 4) 情報収集に十分なデータ数ではなかったが、柳瀬他(2021)は「省察」の質的な深まりに着目した教員養成課程の模擬授業に関する研究でテキストマイニングを用いて共起キーワードを使用しているが、対象者は履修学生32名であること、また、村上(2021)においても小学校教師の体育授業における子供へのかかわりに関する研究にて、テキストマイニングを用いてワードクラウドで分析をしているが対象者は32名であった。以上から本論の対象学生69名は、少人数ながらもテキストマイニングを用いて分析する人数として問題はないと考える。

参考文献・引用文献

- ・赤堀達也：「保育現場で求められる幼児体育に関する考察：リズム体操に着目して」、旭川大学短期大学部紀要, Vol.50, 2020, 71-78ページ
- ・大島一豊 高間由美子：「専門職大学におけるファッション教育の展望と今後の課題AI テキストマイニングの活用」、国際ファッション専門職大学紀要, Vol.16, 2021, 216-233ページ
- ・梅ちか子 他10名：「全国の中学校ダンス授業における指導の現状と課題：令和2年度スポーツ庁武道等指導充実・資質向上支援事業「ダンス指導成果の検証」調査より」、日本体育・スポーツ・健康学会予稿集, Vol.71, 2021, 120ページ
- ・亀岡雅紀 藤瀬武彦：「テキストマイニングによる遠隔での大学体育授業の教育効果の分析—フィットネス教育の感想レポートを用いた検討—」、Vol.14, 2021, 14-28ページ
- ・久保田貴之：「遠隔授業の学習効果に関する研究の動向」、第10回ラーニングメソッド研究会, 静岡産業大学, 2021, 7-13ページ
- ・河野隆志：「体力運動能力調査結果からみるコロナ禍の体育実技の運用と課題」、日本体育・スポーツ・健康学会予稿集, Vol.71, 2021, 333ページ
- ・佐藤冬果 窪田辰政 坂本昭裕：「オンライン授業への自然体験活動導入の試みとその成果—2020年度A大学「身体運動科学」授業報告—」、大学体育研究, Vol.43, 2021, 57-67ページ
- ・鹿内菜穂：「大学体育におけるオンラインヨガの取り組み：授業方法の違いによる満足度と目標達成度の差異」、日本体育・スポーツ・健康学会予稿集, Vol.71, 2021, 98ページ
- ・設楽佳世：「体育実技科目のオンライン授業における運動プログラムの有用性」、埼玉女子短期大学研究紀要, Vol.43, 2021, 11-27ページ
- ・白井麻子：「コミュニティダンスワークショップの体験が参加者に与える効果：評価尺度作成にむけての予備的研究」、舞踊学, Vol.35, 2012, 98ページ

Aug. 2024

体育系大学の遠隔授業と対面授業によるダンス授業について

- ・ 杉山りん：「保健体育科の教員養成課程におけるダンス授業の傾向と内容の検討：現職教員が受講してきた教員養成課程の内容に注目して」, 日本体育・スポーツ・健康学会予稿集, Vol.71, 2021, 106ページ
- ・ 鈴木敏成：「コロナ禍における特別支援学校での体育実践から考えたこと」, 日本体育・スポーツ・健康学会予稿集, Vol.71, 2021, 23ページ
- ・ 須田和也：「新型コロナウイルス感染症蔓延下における大学体育実技の運営（1）—授業運営方針決定の経緯と学生と教員のチャット分析から—」, 共栄大学教育学部研究紀要, Vol.6, 2021, 27-42ページ
- ・ 全国大学体育連合：「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う授業実施に関する緊急アンケート」, 2020, 参照日 2021.10.01, http://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/corona_question_20200419.pdf
- ・ 高橋和子：「コロナ禍における遠隔ダンス授業の成果と課題—双方向のリアルタイム・対話形式の学び—」, 静岡産業大学論集, Vol.27 (1), 2021, 14ページ
- ・ 田中希穂：「大学におけるオンライン授業の実践と課題」, 同志社大学教職課程年報, 10号, 2021, 48-62ページ
- ・ デジタル・ナレッジラーニング戦略研究所 『大学におけるオンライン授業の緊急導入に関する調査報告書』2020
- ・ 中西一弘：「保育者養成課程におけるICT（情報機器）活用の実践：領域「健康」の指導法への応用を念頭に置いて」, 淑徳大学短期大学部研究紀要, Vol.63, 2021, 49-57ページ
- ・ 西田順一 他10名：「新型コロナウイルス感染症第1波の流行直後における大学体育授業の学修成果：遠隔授業による主観的恩恵と身体活動に焦点をあてた検証」, 大学体育スポーツ学研究, Vol.18, 2021, 2-20ページ
- ・ 服部辰広：「対面授業と比較した遠隔授業の学習効果に関する研究—保健医療学部整復医療学科学学生に対するアンケート調査より—」, 日本体育大学紀要, Vol.51, 2022, 1001-1009ページ
- ・ 原田純子 白井麻子：「ダンス発表会の教育的意義についての一考察」, 舞踊学, Vol.36, 2013, 133ページ
- ・ 藤野和樹：「オンラインによる大学体育授業の実践報告」, 大学体育研究, Vol.43, 2021, 99-108ページ
- ・ 松井克典 他5名：「オンラインによるスポーツ実技授業2020年度体育科授業実践より」, 日本工業大学研究報告, Vol.51 (1), 2021, 53-56ページ
- ・ 松本大輔 小林浩平：「オンライン教材を用いた体育授業の考察」, 西九州大学子ども学部紀要, Vol.12, 2021, 93-99ページ
- ・ 村上雅之 他5名：「教職経験豊富な小学校教師の体育授業における子供へのかかわりに関する研究：ボール運動単位における教師の発話および子供の振り返りに着目して」, 北海道教育大学紀要. 教育科学編, Vol.71 (2), 2021, 295-302ページ
- ・ 文部科学省：「高等学校学習指導要領 保健体育編 体育編」, 2018, 596-603ページ
- ・ 文部科学省：「中学校学習指導要領 保健体育編 体育編」, 2017, 115-133ページ
- ・ 文部科学省：武道・ダンス必修化, 参照日 2021, 11, 12 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/13082.htm
- ・ 柳瀬慶子 他4名：「『省察』の質的な深まりに着目した教員養成課程の模擬授業に関する研究（1）保健体育科教育の授業を対象として」, Vol.41, 2021, 157-180ページ
- ・ 山崎正枝：「手拍子を活用したCOVID-19での遠隔授業による国際交流の可能性」, 金沢大学国際機構紀要, Vol.3, 2021, 119-135ページ
- ・ 山津幸司：「新型コロナウイルス感染症蔓延から1年後の大学体育の開講状況：九州地区国立教員養成大学・学部の分析結果からの第二報」, 九州地区国立大学教育系・文系研究論文, Vol.8 (1), 2021, 2ページ
- ・ 横沢翔平 他4名：「COVID-19 感染拡大におけるオンライン体育授業の教育成果」, 文教大学湘南総合研究所紀要, Vol.25, 2021, 145-162ページ